

## 事例11 「いがぐりプロジェクト」における就労支援、居場所づくり

### ●主な事業主体、連携主体

平成 25(2013)年、伊賀市社会福祉協議会に、障がい者雇用を行っている和菓子屋の社長から、「『いがぐり』をブランド化できないか、そして、栗を加工する場であり、障がい者が働くことのできる場ができないか」と相談がありました。JAをとおして栗農家に集まってもらい座談会を開催したところ、「ぜひブランド化を進めてほしい」という声が多く寄せられました。

平成 26(2014)年、障がい者就労支援機関や行政(福祉部門だけでなく、商工や農業部門の部署からも参画)、和菓子組合、商工会議所、JA、農家、NPO等、さまざまな関係機関が一堂に会し会議が始まりました。

平成 27(2015)年、伊賀市社会福祉協議会として助成を活用し、「いがぐり工房」がオープン。栗の仕事は秋のみであったため、かたやきの製造からスタートし、どら焼きやカステラ等、さまざまな和菓子の製造を行っていきました。

平成 28(2016)年、赤い羽根共同募金の助成金を活用し、栗の苗木の植樹がスタート3年間で約 3,000 本を植樹したほか、いがぐり工房には栗をペースト状にする加工機と鬼皮むき機を導入しました。これにより市内の和菓子屋や飲食店へ加工した栗を提供できる体制が整いました。

伊賀市社協として側面支援に徹するべく、平成 29(2017)年から、いがぐり工房の運営をNPO法人えんに移行しました。

### ●現状、課題

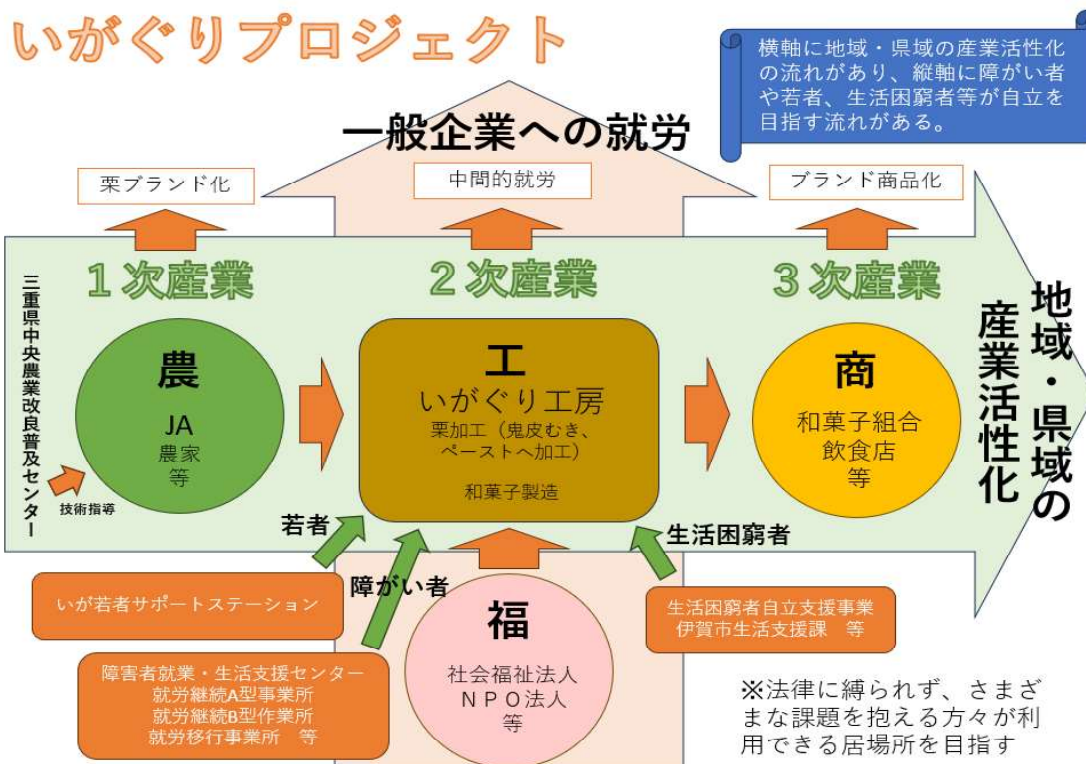
当時、伊賀では、生活困窮者や障がい者、若者たちの自立を支援する機関がそれぞれの方法で支援を行っていました。しかし、相談支援機関のサポートを受けて企業に就職したものの、適応できず退職してしまうケースが多く見受けられました。そこで必要とされたのが、企業へ就職する前の準備期間として、試験的に働いてみることのできる場所でした。また、支援者が本人の特性を把握し、それぞれに応じた支援方針を決定できるような環境も求められていました。このように一般就労へ移行する前の「中間的就労」の場の整備が急務とされていました。

【いがぐり工房の様子】



## ●取組概要

関係機関が集まった会議の中で、農業(1次産業)、工業(2次産業)、商業(3次産業)が連携してプロジェクトを進めることが決定しました。これにより1×2×3の組み合わせで「6次産業」と位置づけ、さらにそこから生み出される「いがぐり」のブランド化、中間的就労の場の整備、産業活性化といった要素を加え、7次産業と独自に命名し、取組を推進しました。



## ●取組におけるポイント

当時、伊賀市社協単独では対応可能な範囲に限られていたため、福祉と全く無縁だった農業や商業関係の団体にも働きかけました。担当者に電話でアポイントメントを取り、資料を持参して説明に伺い、会議への参画を依頼するといった地道な活動を何度も重ねました。

また、関係機関に話を行う際には、各団体が得られるメリットを明確に整理し、できるだけ丁寧に説明するよう努めました。

## ●今後の展開について

移行先のNPO法人えんでは、「いぐりプロジェクト」をきっかけに、「伊賀の芭蕉ネギプロジェクト」をその後に発足。JA・農家・福祉作業所が連携し、30軒ほどの農家が生産した白ネギを、全て福祉サイドで出荷調整し、JAが販売をしていきます。商標登録も完了し、伊賀ブランドとしても認定を受けました。

このように、いぐりプロジェクトを契機に地域の他の生産物へも取組が広がり、地域農業や地域福祉さらには、地域産業の活性化へとつながりました。今後も、これらの取組がさらに発展していくことを期待しています。

- 本事例に関するお問い合わせ先  
社会福祉法人伊賀市社会福祉協議会  
電話番号:0595-21-5866  
メールアドレス:info@hanzou.or.jp